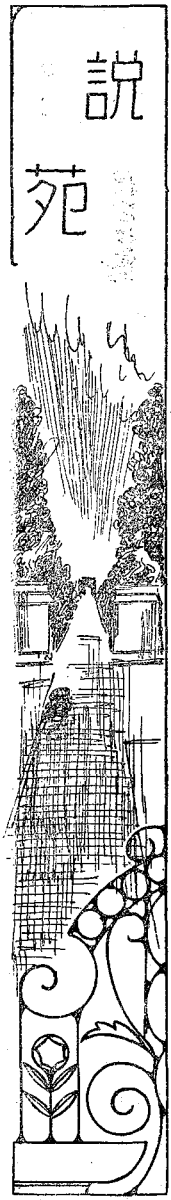


支那滿洲瞥見記（續）

宮本武之輔

支那雜感

前に記した通り、私に取つては滿洲は四回目の旅行であるのと、その最初の學生時代の實習旅行では奉天を中心として約四十日の間、滿洲に滯在して各地を見物したので、少くとも滿洲に就ては多少の認識があり、又支那民族に就ても多少の理解を持つてゐるつもりだつた私であるが、今度の旅行で假令飛脚の樣な慌しい旅程ではあるにしても、中支から北支を一巡して、今更の樣に支那民族と總稱せられる民族の複雜性と、從つて又今日中華民國と呼ばれる國家の非常な複雜性とを認めざるを得ないのであつた。

一例が言語にしても滿洲や北支に使用せられる「漫々的」（マンマンディ）（ゆつくり）と言ふ文字が中支以南では「漫々的」（メンメンテイ）と發音せられる。又「小孩」（セウハイ）（少年）「苦娘」（クウニヤン）（少女）などゝ言ふ言葉は、侮蔑の意味に解せられるとかで、南方では決して使用しない。

言語の上にさへさうした相違がある如く、南方と北方とでは民族も違へば氣風も違ふ。今日國民黨の全國統一が成

つて南京には國民政府が組織せられてゐるとは言つても、その威令は邊境の封域は勿論、古來の所謂支那本部にさへも普及せず、從來廣東には西南政務委員會があり、今又北支に冀察政務委員會が生れるに至つたに就ては矢張り現實にそれだけの必然性がある事を認めない譯には行くまい。

加ふるに今日中國の要人、中堅知識階級の殆ど全部が外國留學生の出身であつて、日本又は英米獨佛諸國に留學した連中である上に、國内に於てさへ各地の大學中、英國系、米國系、獨逸系などゝ稱せられる大學が澤山あつて、夫々の國語と組織とに從つて教育を施してゐるのであるから、その間には自ら系統と黨派とを異にするものがあるのも看過すべからざる點かと思ふ。從つて中國官民に接する場合には、それだけの微妙なる心遣ひや心構へが絶對に必要である。

唯支那の國民性が非常に功利的であり、利己的である點は多くの人の力説する所であつて、譬へば匪賊に拉致された人質の間でも日本人同志は假令吸ひ殘りの煙草でも分けて喫むと言ふのに、支那人同志には絶えてさうした相互扶助の精神が認められないと言ふ。私はさうした國民性を認めないのでもなく、又それを辯護しようとするのでもないが、その故に日華兩國の提携親善が絶對に不可能だとは考へないのである。

私としては親しく中國官民に接してその間に友交を結ぶと言ふ樣な事は、今回が最初の機會だつたのであるが、その間の短い見聞と乏しい經驗とから、私は今日中華民國の知識階級は少くとも我々が歐米人と交はるのと同じ程度の好意を以て交はり得ると言ふ印象と感銘とを享けたのであつた。私は心からその新しい經驗を喜ぶ。

天津市工務局々長楊豹靈君は米國コロネル大學出身の若い土木技術者であるが、私と食卓を共にして、兩國の親善が相互的接觸を相互的理解とを基調として始めて達成せられると言ふ主張に對して力强く私に共鳴した一人だつた。

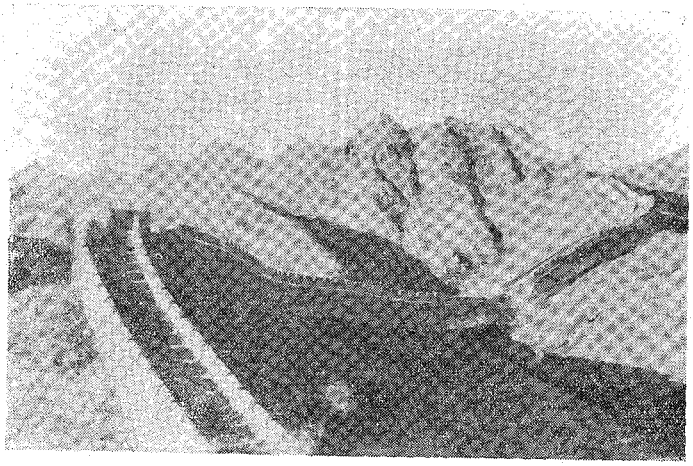
東洋文化

『日華兩國は古い文明の基礎を同じくする……』

とは多くの人の說く所であるが、支那は遠く三千年の昔に燦然たる文化を誇つた民族であり、わが國はその支那から古い文化の殆ど凡てを輸入した國である。

その古い東洋文化は主として精神文化であり、東洋民族が人類の福祉繁榮など丶言ふ事は全く度外視して只管に精神文化に陶醉してゐる間に、駸々として勃興した西洋諸國の物質文化は彼等を遙の後方に委却したのであつた。

古い精神文化の民族が今や歐米各國からの物質文明の移植に汲々として日も猶ほ足らず、外國語の教授を教育課程上の必須課目としなければならない現狀は



萬里長城

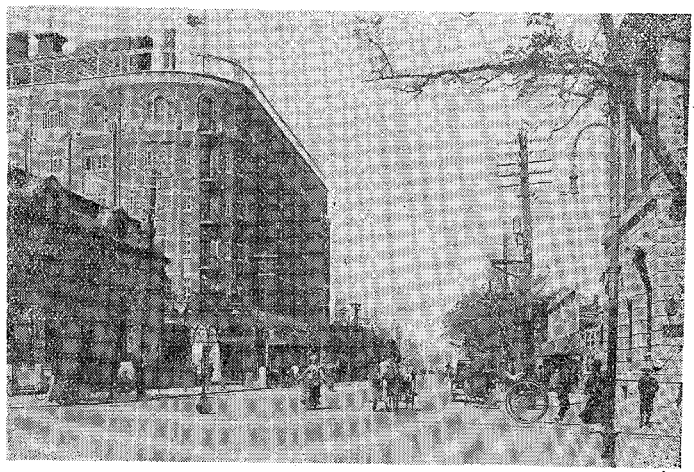
日本と言はず、中國と言はず、坐ろに今昔の感に堪えざらしめる。幸にして今日のわが國は物質文化に於ても歐米各國に比肩し得べき狀態に達したが爲に、歐米文化吸收の方便としての外國語の習得は次第にその必要を減じつ丶あるとは言へ、中國に於ては彼等が我々日本人と會談するにさへ英語や獨逸語を使はなければならない變則的な現狀にある。之は印度、埃及など丶言つた樣な被征服民族の國土でなければ見られない現象であつて、東洋民族に取つて深く屈辱としなければならない所である。

日華兩國人の會談が自由に日本語又は支那語で行はれ得る樣にならなければ、兩國の親善と、延いては東洋民族の發展隆盛もそ

の前途が極めて遠い。

現に中國からは日本に五千人を超える留學生が送られる外、各地に日本語の學校が設立させられて漸次日本語を話す者の數を增しつゝあると言ふのは『東洋人の東洋』を建設する大理想の上から誠に慶賀すべきであるが、中國人が日本語を習つて日本を理解するに努めると同樣に、日本人も亦支那語を習つて中國を理解するに努める事が最も肝要である。凡ての問題解決の鍵がそこにある。

支那料理の食卓では『請々(チンチン)』(どうぞ)だとか『乾盃』だとか言つて頻りに酒を勸められるが、乾盃を謝絕する場合は『隨便(スイベン)』(勝手に戴きます)と言つた樣な挨拶をする。それを私は上海で行政院參事の張操君に敎はつたのであるが、北平あたりで續けざまに乾盃を强ひられた後で、『今回隨便(チンホイスイベン)』などゝやると、食卓にある中國の連中が滿面に喜色を湛へて、『仲々お上手です。』と賞める。そこに釀される靄々たる雰圍氣、それこそは事微細ではあつてもやがて日華親善の核子たるべきものである事を私は痛感するのであつた。



通山大連

本流の鮨などを旨しく食べた後で、八時すぎ北寧線の列車

大連會議

十一月四日午後五時から北平大使官邸に開かれた歡迎茶會に列して日

で北平を出發すると翌朝の七時四十分山海關に着く。『天下第一關』を誇る萬里長城が此處から始まる。空には旭日が燦然と輝いてゐるのに、地には霜が白く、小川には薄氷が張つて朔北の寒さが身に泌みる。之からが滿洲國で列車の中でも日本紙幣が滿洲國幣と同樣に通用する。

今まで通つて來た中支や北支に比べると滿洲では地味が瘠せてゐるのが際立つて眼に着く。錦縣、大淩河など所謂熱河戰の戰跡を過ぎて、奉天で滿鐵の特急「亞細亞」に乘換へ、その夜の十一時大連に下車した時分には零下二、三度の寒さだつた。

翌日のプログラムは大連の視察見學だつたが、私は伏見臺の中央試驗所と沙河口分場とを視察したゞけで、あとはヤマトホテルで休養した。夜は滿洲土木建築協會の招待宴があり、更に高等學校以來の友人と舊交を溫める爲に半宵を費したが、流石に大連は私に取つて馴染の深い土地であるだけに懷舊の情止め難いものがあり、思はずも夜の更けるのを忘れた。

大連會議は十一月七日技術會館で開かれ、午前中は講演會、午後は專門家懇談會が催された。然し滿洲に於ける會議は大連旅順は固より、奉天新京にしても殆ど日本人だけの會合であつて、講演者も聽衆も全部が日本人であるから、東洋工業會議の趣旨から言へば寧ろ附錄の樣なものであつて、國際的重要性の意味からは支那各地の會議に比べて極めて意義に乏しい。

從つて最初から私は滿洲に於ける會議には多くの興味を繫がなかつたけれど、新興滿洲帝國の最近三年間の施設の跡を見る事と、その滿洲國官吏として新京哈爾濱に勤務する多くの舊同僚や友人に會ふ事を唯一の樂しみに、一行の訪滿旅行に參加したのであつた。

翌八日、一行は更に旅順を訪問して旅順會議を開くプログラムだつたが、旅順の戰跡は私は既に三度も見物した事があるので、その夜の八時一先づ一行と別れて單身北行の列車に投じて大連を出發したのであつた。

哈爾濱の印象

朝八時五十分新京に着いて國道局や、國都建設局の友人に迎へられ、直ちに國道局に自動車を走らせた。直木局長は豫期の如く不在だつたけれど、坂田第一技術處長、本間第二技術處長始め多くの友人諸君に久し振りに面會して、それらの諸君の潑溂とした元氣一杯の姿に接した事は何よりの喜びだつた。

午前中自動車で新京市水道の淨月潭貯水池の見物にゆく。南新京驛を距る東南一八・五粁、伊通河の支川小河臺河を長さ五五五米、高さ一九米の土堰堤で締切り、流域面積七八平方粁、貯水池面積四・三平方粁、容量二千五百九十萬立方米の貯水池を造つたもので、工事は略々竣功に近い。現場附近は滿人の警備兵が銃劍を以て萬一を警戒して呉れるが、まさか此の邊に匪賊の危險があらうとも思はれない。

哈爾濱キタイスカヤ街

午後一時四十分新京飛行場から飛行機に乘つて單身哈爾濱に向ふ。此のルートを飛行機で飛ぶのは之で三回目であるが、畑に農作物のある頃は機上からはそれが花毛氈の樣に見えて誠に美しいのに、今は滿目蕭條たる平野の間を縫つて拉林河や松花江が蜿蜒として蛇行するのが見られるに過ぎない。一時間ばかりで哈爾濱に着き市公署や國道局建設處の友人に迎へられて北滿ホテルに泊る。

夕方から哈爾濱は急に氣溫が下つて零下一〇度位の寒さになつた。その間を忙しく都市計畫事業の現場を見て廻つた上で、夜はグランド・ホテルで友人連中と夕食を共にしながら雜談に華を咲かした。前菜の豐富なのを特色とするロシヤ料理、それにウオツカの味も久し振りに懷しかつた。豐滿な肉體をした二十一歳のロシヤ娘が巧みに日本語を話して、前菜を卓に運びながら、

『これ、ロシヤのお漬物です』

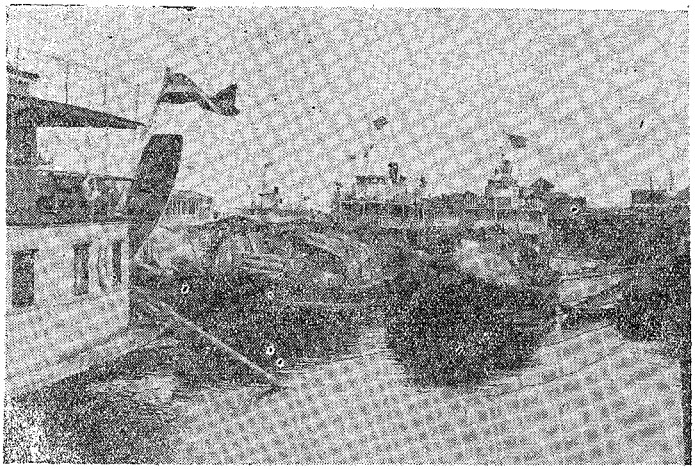
など〻説明する。此のホテルにしても、それからファンタジヤなど〻言ふロシヤ人のキヤヴアレエにしても昔は日本人の出入りする事を嫌つたものださうであるが、北鐵接收後の今日ではロシヤ人の間にも盛んに日本語が話され、ロシヤ勢力の衰退と同時に之に代る日本勢力の進展が著しく眼立つて感ぜられる。此の娘は二箇月ばかり日本語學校に通つたとかで、私の手帳に漢字と假名とで鮮かに、

『哈爾濱馬家溝ポクラニチナヤ街十八號　ターニヤ　ツリーフオノワ』

と書いて見せてから、

『ターニヤが名前、ツリーフオノワが苗字です』

と說明するに至つて私は啞然として娘の顏を見詰める外に術を知らなかつた。哈爾濱の中央通キタイスカヤ街を通つて見ても百貨店の雜貨は日本製品が大部分を占めてそこにも日本勢力の浸潤が明かに感ぜられる。



哈爾濱傅家甸埠頭

翌日は市公署、鐵路局、國道局建設處などを歴訪したが往年ロシヤが北滿鐵道、もとの東支鐵道を建設するや直ちに松花江に關する氣象觀測及び水理調査に着手し、多年に亘つて雨量、水位その他の學術上の精密な調査を行つた、その貴重な資料を見せられた時にはその遠大なる計畫に對して感嘆の念を禁ずる事が出來なかつた。日本人が植民する場合には常に神社と醜業婦とがパイオニヤの役割を演ずるのと對比すると、そこにも亦國民性の相違が窺はれる。

夕方傅家甸の松花江護岸改良工事を視察にゆく。ランチの甲板に河水の飛沫が直ぐに凍り付く樣な寒さだつた。三年前の大同元年の洪水に浸水の憂目を見た傅家甸の防水と同時に江岸の荷役に便ずる爲の物揚場兼用の護岸工事であるが、今の滿洲國としては此の種の局部的防水工事の外は太規模の治水事業計畫の實施の如きは未だその時機ではあるまい。

その夜はタトスと言ふレストラントで日本大學出身の諸君にコーカサス料理の夕食を饗せられた。コーカサス料理は北平あたりにある成吉斯汗料理などゝ同じく、羊肉を串に刺して炙つた料理が特色であるが、羊こそは英雄成吉斯汗が陣中の食卓を賑はした無上の珍味だつたのか、

『羊煮て兵を犒ふ霜夜かな』

と言ふ古人の名句などが思出されて、坐ろに人情の溫かさが嬉しく身に泌みるのだつた。

夜の十一時友人諸君に送られて凍るが如き哈爾濱を出發して新京に引返す……。

國都新京

朝六時十五分新京に着いてヤマトホテルに這入ると間もなく會議の一行も亦大連から鞍山を經て新京に到着して、再び一行に合流する。

新京の第一日は午前中を新京神社の參拜や南嶺の戰跡視察に費して、午餐は鹿鳴春で開かれた新京特別市長韓雲階氏の招宴に列した。韓氏は名古屋高工の出身だとかでその日本語は流暢を極め、迎客の挨拶にも一々名刺を差出しな

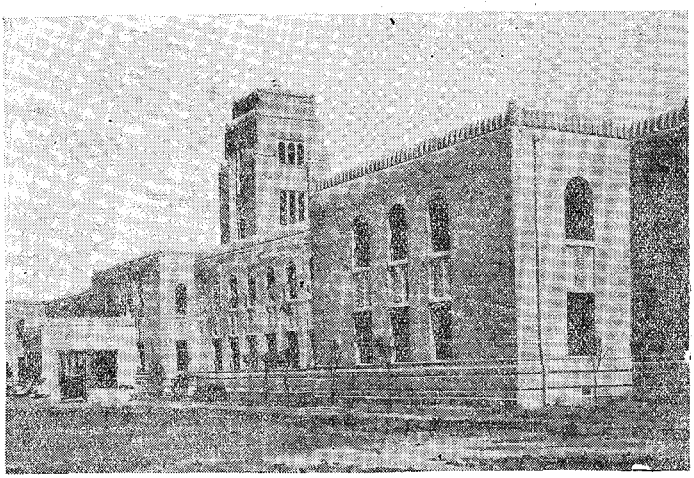
から、

『韓雲階と申します。本日はお忙しい所を却つて御迷惑で……』

と言つた調子の、日本語獨特のエキスプレツションまで呑込んでの應對振りは誠に鮮かなものであつた。

上海から北平まで、到る所の觀、辭も講演も挨拶も夫々日支兩國語でなされて之に一々通譯がついたのであるが、此の午餐會で始めて通譯なしの挨拶が韓市長と井上首席代表との間に交換せられた事は愉快であつた。

午後の日程は新京の國都建設や國道局の國道建設事業の視察に費やされた。新京の國都建設事業は特別市政區域二〇〇平方粁の內の一〇〇平方粁に施行せられ、之を官公廳舍敷地、道路、公園、軍用地等を合せて四七平方粁、市街地域五三平方粁に分つのであるが、現に滿鐵附屬地の中央通に接續して大新京市を南北に縱貫する幅六〇米の大同大街を始めとして大同廣場、安民大路、安民廣場など新市街の輪廓が大體に於て形作られ、道路の建設や建物の建造が縱橫に營まれてゐるのは、新興滿洲國の國都建設氣分を橫溢せしめて、見るからに華々しいものがあつた。わが東京の復興は震災後の復築であり新南京の建設は舊都の改築であるのに比べて大新京はそれが新築である點に歷史的の意義と特色とを持つの

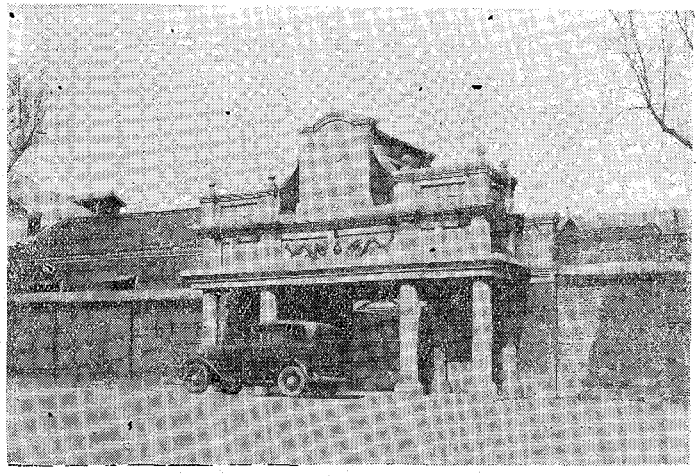


局設建都國と部教文

である。

國道建設事業も亦同樣であつて、獨創に伴ふ無限の快味の蔭には無限の困難がある。而も新設國道の多くは滿蘇國境附近に築造せられるものであつて見れば、治安工作の完成せられない邊疆に踏入つて、此等の建設事業の第一線に活動する人々に對しては萬腔の敬意が拂はれなければならない。

その夜は「八千代」と言ふ料亭で官民有志の歡迎晩餐會があり、主人側からは長岡總務廳長、大達次長、韓新京市長その他が出席せられて主客ともに存分に打寛いだ氣分に浸つたのであるが、近頃東京などでも頻りに唄はれる「白頭節」も新京で聞けば更に一層情緒の豐かなるものあるを感ぜしめる。



皇居正門（興運門）

『白頭み山に積りし雪は、融けて流れて鴨綠江（アリナレ）の、可愛い乙女の化粧の水』

『泣いて、泣いて〳〵、泣いて〳〵泣いて、思ひ出しては泣き崩れ、泣いて血を吐く不如歸』

『君の御爲咲いたる櫻、御國に嵐の吹く時は、散れよ背の君勇ましく』

謁見

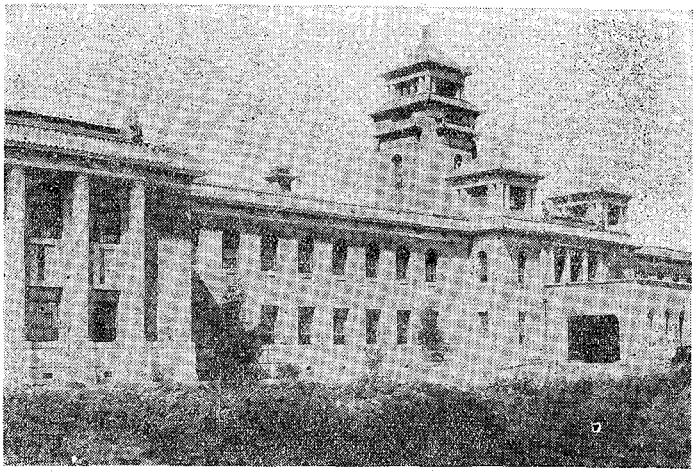
十一月十一日、朝十時背廣服をモーニングに着換へ、自動車を連ねて宮廷に參內する。會議の一行中官職に在る者に對しては康德皇帝から謁見を賜はる御沙汰が傳へられたから である。宮廷は元の執政府のまゝの假殿であつて、その外

觀と言ひ內容と言ひ北平の舊皇城を覗て來たばかりの眼には限らない事が泌々と感ぜられる。

は坐ろに悼はしさをさへ感ぜしめる。

皇帝及び皇后の內廷に於ける御生活は宮內府に奉仕する高官にさへ窺ひ知られず、先年わが秩父宮殿下御訪滿の砌、皇后が內廷から朝殿に出坐せられて皇帝と御同列で殿下に御對面あらせられたと言ふのは支那古來の習慣からは全く破天荒の御待遇だつたと傳へられる。

階下の質素な控室で皇帝の御出御を待つ程もなく國務總理張景惠侍從武官長張海鵬の諸氏が參內する。何れも綠林出身の老武將である事を思ふと、有爲轉變は獨り康德皇帝の御身の上ばかりには速ならん事を祈つて已まない。



謁見室は二階であつた。代表一行は井上博士を先頭にして順々に謁見室に參入し、皇帝から一々御握手を賜はる。

大新京建設計畫は市の中央に新たに皇居を御造營する豫定になつてゐるのであるが、それ迄には猶ほ多少の年月を要する。それに假令皇居造營の工事だけが竣功したとした處で、國都新京が大都市としての完成を待つに非ずんば索漠荒凉たる原野の中央に皇居だけを移す譯にも行くまい。康德皇帝の宮廷の質素であり手狹であるのを拜觀するにつけても新京國都建設事業の完成が名實とも

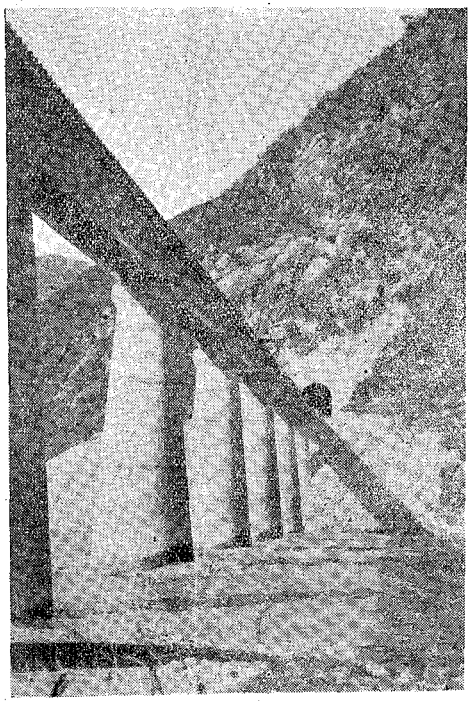
唯康德皇帝が新京御〇〇を〇ませられず北平御〇〇の意〇なるものがあると傳へられるのは滿洲國將來の爲に極めて機微な問題であるから、特に之に言及することを避ける。

新京會議

新京會議は十二日午前十時から中央銀行倶樂部で開催せられ、午前中は講演、午後は韓新京市長司會の下に懇談會が開かれたが、懇談會に於ては滿洲國の土木、建築、發電、採鑛、電信電話その他の各部門に亘つての滿洲側の短い講演があり、之に關して代表一行との間に質疑應答が試みられて非常な活況を呈した。

張國務總理に對しては皇帝の謁見が終つてから後、更めて之を國務院に訪問して訪滿の挨拶を述べたのであるが、張氏は會議代表一行の今回の訪滿を心から喜び、『友邦日本の援助によつて生誕したわが滿洲國は、同じく日本の指導の下に成長發育せしめられん事を希望して已まない』と繰返して語るのだつた。

それにしても滿洲國は愛親覺羅氏の社稷が復僻したのではなくして滿洲の新天地に五族協和の王道樂土を建設せんとする三千萬民衆の總意に胚胎するのであるが、その新興滿洲帝國政府の顯官が綠林出身の頽齡に近い老將であるのに對照して、歷史の古い隣邦中華民國に於ける國民政府の要人が何れも壯年の知識階級であるのは一種のアイロニーである。



京圖線沿線

京圖線をゆく

一行は新京から奉天に引返して奉天會議、更に朝鮮に這入つて京城會議を開く日程であつたが、私は十一月十三日朝七時滿鐵線を南行する一行と新京驛で別れて京圖線を東行して朝鮮の羅津に廻る單獨コースを取つた。

昭和七年渡滿の際には敦化圖們間の所謂敦圖線は建設工事中であつて、私は新京から圖們(舊稱灰漠洞)までを飛行機で飛んで朝鮮に這入つたのであるが、敦圖線開通以來新京淸津間には急行列車が運轉せられ、又最近(十一月九日)雄基羅津間の所謂雄羅線の開通を見てから、北滿と北鮮との鐵道聯絡は非常に便利になつた。唯京圖線は全通以來屢々匪賊の襲擊を受け、甚しきは新京吉林間に於てさへ急行列車が匪賊の爲に顚覆させられた最近の事例があり、夜間急行列車は時間經濟上最も便利であるに拘らず、今でも殆ど乘客がないと言ふが如きは正に滿洲國の國辱である。

その爲に私も夜行列車を避けて早朝新京を發する急行列車を選んだのであるが、北滿の晩秋は滿目荒凉として沁々と物の哀れを感ぜしめる。

敦圖線の開通を急ぎ、羅津の築港を急ぎ拉濱線の建設を急いだのは北滿鐵道がロシヤの經營下にあつた時代に於て浦鹽に對抗して北滿の物資を最短距離の海港に搬出する必要から計畫せられたものであるが、北鐵接收後の今日は情勢が全く一變して羅津築港の意義は少からず減殺せられたと言はなければなるまい。

私は近く第一期工事竣功せんとする羅津を視察する爲殊更に此のルートを取つたのであるが、吉林を過ぎ、敦化を過ぎ、拉法を過ぎてすつかり夜になつて仕舞つた寂しい圖們驛に下車した時分には、國境の夜風が凛烈たる寒氣を孕んで新興の小都會に吹き荒んでゐた。

『此處は朝鮮北端の　二百里餘りの鴨綠江
渡れば廣漠南滿洲　酷寒零下三十餘度
卯月の半ばに雪消えず……(國境警備の歌)

圖們江を隔てゝ對岸は朝鮮の南陽である。　(完)